

岸辺露伴は驚かない 『花神村』

大口径ウナギ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

漫画家を目指す青年、舟城悠然と偶然町で会う露伴は、彼から取材に行つた村のお土産だと言つてガムを一つ貰う。そんなことはすっかり忘れていた2週間後、また町で会つた舟城悠然は、見違えるほど痩せ細つていた。異変を感じた露伴がスタンドで確認した所、舟城の恐ろしい2週間が書かれていた。

『花  
神  
村』

目

次

1

## 『花神村』

??

現在、週刊少年ジャンプで大人気連載中の『ピンクダーカの少年』、その新しい展開のネタを探して町を当てもなく歩く。一見、何の生産性も無いような行動だが、意外とこういう所から新しいネタが見つかることもあることを僕は経験で知っていた。思い思いに町を歩く人々の喧騒、空を羽ばたく鳥の泣き声、眩く照り付ける太陽の日差し、こう言つた生きたエネルギーに囲まれてこそ、いいアイデアは浮かんでくるのだ。これは良いアイデアが出るかも知れないなと珍しく機嫌が良くなつていた時だつた。

「あれ?、露伴先生?、露伴先生じゃないっすか!?

後ろから何とも知性が感じられない声が聞こえる。自分の中の何かが急激に下がっていくのを感じる。振り返るのもめんどくさいので、無視をする。

「ちよ、ちよつと!、露伴センセー!?、聞こえてないっすか!?

それでもなお声をかけて来る。露伴は渋々振り向く。

「聞こえてるよ。何か用もあるのか?」

僕の前に立つているこの男、舟城悠然は同業者である。いや、同業者という言葉は不適切だったかもしれない。正確には、漫画家を目指している男だ。年齢は二十歳。身長175センチほど、綺麗にまとめた髪型で筋肉質な身体をしており、常に笑顔を浮かべてるやつで、ぱつと見では漫画家を目指しているなんてわからないだろう。週刊少年ジャンプで連載することを夢みて、毎日読切の執筆をしていると言つ。以前、この町で偶然すれ違い、僕が岸辺露伴だと気づくと一方的に話しかけてきてから、こうやって町で会うと話しかけてくるようになつてしまつた。

「いやー、こんなところで会うなんてやつぱり俺たち気が合いますね!露伴センセーもネタ出しつすか?、あ!俺また読切書いてみたんすよ!!ちよつと感想もらえないっすかね!」

正直に言うと、僕はこいつが嫌いだ。人の話を聞かずに自分のこと

ばかりベラベラと話していく。あのアホの億泰やクソツタレの仗助を思い出し、イライラしてくる。

「あー・そうそう、俺昨日取材から帰ってきたんすけど、これ！良かつたらどうぞ！」

そういうて悠然は、肩にかけていたカバンからガムを取り出し、露伴に渡していく。

「ン？なんだこれは……、ガムか？」

これまでも露伴は漫画のリアリティ追求のため、様々なガムを噛んできた。しかし、悠然が渡してきたガムは、これまでのどれとも違う、何とも言えない色の包み紙に包まれたものだつた。

「俺！ちよつと次の読切のためにS県の山奥の花神村つて所に取材に行つてきたんすよ。知つてます？露伴センセー」

聞いたこともないが、ここで知らないと言つて下に見られるのも癪だ。

「ああ、花神村ね、もちろん知つてるさ。当然だろ？」

「さつすが露伴センセーっすね！そこで……、あ！すんません露伴センセー、俺ちよつと用事あるんすよね……」

なぜ僕がもつと話したがつていると思つてているのかは不思議だが、これはちようど良い。ここで切つてしまおう。

「そうかそうか、それはとても残念だが、用事があるんじゃあしようがないな。では、僕は行くとするよ」

「すいません露伴センセー、また！俺の読切読んでくださいね!!」

全く面倒くさいやつだ。次は絶対に無視しよう。そう思いながらまた歩き出そうとすると、右手に握っていたガムの存在を思い出す。「ム・・・・・・」

気にならないといえば嘘になるが、今はガムを噛む気分ではない。カバンに入れておこう。

「さて、とんだ邪魔が入つたが、ネタ出しの続きをしようか……」

家に帰る頃には、良いネタが思いついた嬉しさから、貰ったガムの存在はすっかり忘れていた。

??

2週間後、僕は編集との打ち合わせをするため、駅に向かつて歩いていた。

「…………ン？ あれは……舟城悠然じゃないか……何やつてんだ、あいつ……？」

違和感を感じた、確かに視線の先で歩いているあの男は、2週間前に話しかけてきたあの舟城悠然のはずだ。だが、何かがおかしい。

「あいつ……、あんなに細かつたか……？」

僕の記憶では、舟城悠然という男はもつとこう、がつしりとした体格だったはずだ。背筋も伸びており、自分への自信に溢れた男だったと記憶している。あいつの性格は嫌いだつたが、あいつの持つエネルギー、作品に対する情熱は僕は一定の敬意を示していた。だが、今のあいつからはエネルギーが感じられない。体は痩せており、髪もボサボサ、服もよく見たらあの時のまんまじやないのか？ 打ち合わせには遅れられないが、それでもあの尋常じやない様子は異常だ。僕は舟城に近づいていき、さつきまでは気づかなかつたことに気づく。何か、食べている……？

「お、おい。何してるんだ……？」

こちらに気づき、ゆっくりと顔を向ける。

露伴は驚きのあまり、声を出す。

「なっ！」

舟城の顔は、見違えるほど変わっていた。強いエネルギーを宿していた目は半分閉じており、目の下には大きなクマができている。頬もこけており、何かをひたすらに噛んでいる。

「お、おい！、何があつた！？ どうなつているんだ！」

舟城は力ない声で答える。

「あ……、露伴センセー……、クチャ、どーしたん、クチャ、すかー、そんなんに、クチャ、慌ててー」

舟城はひたすらに何かを噛んでいる

「お前……、何を噛んでいるんだ……？」

「あれ、クチャ、何で露伴、クチャ、センセー、クチャ、何で、クチャ、ガム噛んで、クチャ、ないんすかー」

「ガム・・・・・もしかしてあの時のガムを言っているのか・・・？」

「イヒヒヒ、このガム、クチャ、スッゲーうまいんすよー、クチャ、おれえ、クチャ、これから・・・、あの村にまた貰いに行くんすよ・・・どう見ても普通ではない。そう確信した露伴は、右手を舟城の方へ向け、小さく咳く

「何があつたか見てやる。『天国への扉（ヘブンズドア）』空中に少年の絵が浮かび上るとともに、舟城の顔が本のようになラパラとめくれていく。

「なになに・・・、『舟城悠然、2000年生まれ、身長174・8センチ、体重70キロ、趣味ランニング、筋トレ、漫画のネタを探すこと』、こんなことはいい、問題はあのガムのことだ」

読み進めていく

『5月18日、ネットの掲示板で面白い情報を得た。何でもS県の山奥に不思議な村があるらしい。これは次の読切のネタになるかもしない、早速明日取材に行こう』

『5月19日、幸運なことに今日は全国で快晴らしい。絶好の取材日和だ。電車で最寄り駅まで行くが、最寄り駅と言うにはあまりにも遠い。しようがない、ここからは歩いて行こう。』

『5月20日、やっと着いた。山奥とは聞いていたが、まさかこんなに山奥にあるとは思わなかつた。が、村に着くと疲れが吹き飛んだ。辺り一面に真っ赤な花畠が広がつていた。なんて綺麗な花畠なんだ。こんなに綺麗な花は見たことがない。何という花なんだろう』

「花・・・・・？」

読み進める

『村の人々と挨拶を交わす。俺のことを歓迎してくれるらしい。何でもこの村は花神村と言つて、自給自足の生活をしているそうだ。最初に見た花畠のことを聞くと、詳しく教えてくれた。あの花は『如月花（せんけつか）』と言うらしい。世界でこの村にしか咲かない珍しい花のようだ。どうやつて育てているのか聞いた所、それは教えてくれなかつた。まあ仕方ない。その代わりと言つて、如月花を使つた料理を

振る舞つてくれた。花の料理なんて食べたことなかつたが、これが美味しい。いや、美味しすぎる。こんな料理は食べたことがないと言うと、村の人たちは喜んでもつと食べさせてくれた。

「如月花なんて花聞いたことがないぞ・・・、こいつ、なにを食べたんだ・・・」

『5月21日、昨日の夜の記憶がない。まあ大方酔つ払つて寝てしまつたんだろう。村の人々にそろそろ帰ることを伝えると、お土産としてガムをくれた。これは何だと尋ねると、あの花を練り込んだガムだと教えてくれた。これは嬉しい。これで帰つた後もあの味を楽しめる』

『5月22日、町で露伴先生に会う。そうだ、露伴先生にも一つガムをあげよう。一つ減るのは残念だが、きっと喜んでくれるに違いない。あんなおいしい花は他にないのだから』

「・・・・・・・・・・・・」

### 読み進める

『5月25日、体が変だ。ガムを食べていいと全身に悪寒が走り、頭が割れるように痛い。あの味を知つてから、他の食べ物なんてゴミにしか思えない』

『5月29日、症状が悪化している。もうこのガム以外見たくもない。ああ、噛んでる間だけが全身の痛みが引いていく。』

『6月2日、まずい、ガムがあと一つしかない。クソ、クソクソクソ、これがなければ俺は生きていけない。』

『6月5日、もう限界だ、味もほとんどなくなつた、体が重くて仕方ないが、もう一度あの村へ行こう。金なんていくらでも払う。』

「こいつがおかしくなつたのはそのガムが原因か」

露伴は考える。別にこいつのことは好きじゃないし、こうなつたのは自業自得とも言える。だが・・

「・・・こんなやつでも僕の漫画を大好きだとつてくれた。こいつは僕のファンだ。このままほつとく訳にはいかない」

汚いがしようがない。舟城の口からガムを取り出し、持つていたティッシュで包む。そして、舟城にこう書き込む。

「花神村に関する記憶を全て忘れる。・・と」

「これで良い、こいつはここ2週間の記憶が無くなるだろうが、自分で何とかしてもらおう。

開いていたページが閉じていき、舟城が目を覚ます。

「・・・・・あれ?、露伴センセー、なにやつてんすか?て、あれ?  
俺何やつてんだ?」

「別に何でもないよ。それより、僕はこれから打ち合わせがあるんだ。  
もう行く」

「あ!ちよちよつと待つてくださいよ!ってん?、体に力が入らねえ」「病院に行つた方が良いかもな。まあ、そこまでは僕は面倒は見ない」「なんか良くわかんねえけど、また俺の読切読んでくださいよ、センセー!!」

「・・・・・気が向いたらな」